

序論)

私達はずっとイザヤ書を読んできていますが、今日の箇所からイザヤ書は新しい段階に入っています。それはどのようなことかという、イザヤ書 1 章から 13 章の部分は、おもに北イスラエルと南ユダ王国についての預言が書かれており、神の民に対する預言が語られていました。続いて 14 章から 23 章の部分はイスラエルの周辺諸国、エドムであったり、バビロンやアッシリアであったり、またはエチオピアやエジプトといった異邦人の国々に対する神様の裁きの預言が書かれていました。

そして、今日から始まる。イザヤ書 24 章から 27 章までの箇所は「イザヤの黙示録」とよく言われる箇所、全世界に対する神様の裁きが書かれている箇所となっています。ですから、この箇所にはイザヤ書における世の終わりの出来事を指す「見よ」とか、「その日」ということばが使われています。

①荒廃した地

まずは 1 節から 3 節の部分を読みましょう。

- 24:1 見よ。【主】は地を荒れ果てさせ、その面をくつがえして、住民を散らされる。
24:2 民は祭司と等しくなり、男奴隷はその主人と、女奴隷はその女主人と、買い手は売り手と、貸し手は借り手と、債権者は債務者と等しくなる。
24:3 地はすっかり荒れ果て、すべてかすめ奪われる。【主】がこのことばを語られたからである。

まず、「その日」【主】のさばきの日に何が起こるかという、世界の社会体制がひっくり返される。そのような出来事が起こると預言されています。

今、私達の社会は民主主義でみんな平等だと言いつつも、実際には色々な格差があったりします。例えば民と祭司といった宗教的な格差。プロテスタントだとあまり実感し辛いかもかもしれませんが、ローマカトリックの階級みたいなものをみるとそのような宗教的な格差が今の時代にもあるということがわかります。また、奴隷と主人の格差のような、いわば社会的立場の格差は間違いなくあります。一時的にはその社会的立場の格差をなくそうと頑張っていた時代があったのですが、今は支配者層というか指導者層と一般的な民衆の立場の差は広がってしまっています。また、買い手と売り手、貸し手と借り手、債権者と債務者といった経済的な格差というものが間違いなくあります。

神様は、裁きの日はこの格差を打ち壊して、すべての人が神様の前で等しく、平等な存在として扱われます。ただ、残念なことに、その平等さというのは等しく裁かれる存在という意味で平等に扱われるのです。

それはどのようにしてかという？ **3節**に「地はすっかり荒れ果て、すべてかすめ奪われる」とあって、これは誰が奪うのかというと神様が人の栄光を奪うということです。

神様は格差社会をさばきによって打ち壊すことを決められて、人の栄光を奪うことによってその御業をなされるのです。そして、この預言でその裁きを宣言されたので、この裁きは必ず実行される神様のご計画ということになります。

この格差の破壊は世界中になされることで、皆が等しく神様に裁かれる存在になるといいますが、特にダメージをうけるのが **4節**にある「地の最も高貴な人たち」です。これは、いわゆる先程いった格差社会において上の立場にいる人たち、別の言い方をすると「地上で最も高ぶっている人たち」 そうゆう人たちが神様の裁きによって嘆き、悲しみ、衰え、しおれていくことになります。

みなさん、どうでしょうか。ある意味でこういった格差社会というのは、人が繁栄していった結果、生じてしまった副産物でもあります。神様は裁きのときにそういった格差を壊し、ある意味でいままで積み重ねていった人の繁栄をまるごとひっくり返してしまわれるのです。

なぜ、神様はこのような人間の努力を無にするような裁きをされるか。その理由が **5節**にかかれています。

24:5 地はその住民の下で汚されている。彼らが律法を犯して定めを変え、永遠の契約を破ったからである。

ここに人が犯した4つの罪が書かれています。

一つは、地を汚したということ。今は **SDGs** とかかって一生懸命環境に配慮して世界のバランスを整えようという働きがありますが、私達人間は、自己中心的に生きていった結果、神様に委ねられたこの世界を汚してしまったのです。これが1つ目の罪

そして、2つ目の罪は神様の律法、ルールを破ってしまったということ。これはモーセに与えられた旧約聖書の律法を破ってしまっているという理解することもできるし、アダムとエバが「この善悪の知識の木からとって食べてはいけないよ」と神様が定められたのに食べてしまいましたね。あのことを指しているとも理解することがで

きます。どちらにしても私達は神様が求めておられる秩序に逆らってしまっているのです。それが2つ目の罪

そして、3つ目は、定めを変えてしまう罪。つまり、神様が定めた秩序に逆らうだけではなくて、自分たちに都合のいいように秩序を変えてしまう。例えば、互いに愛し合いなさいって【主】が言われているのに、「いや、周りの人を蹴落として勝たなければいけないのだ」と社会のルールを変えてしまったり、例えば「男、女」と定められているのに、「いや、今どき男、女なんて分けるのは間違いだ」って言うてしまったり、そうやって神様の秩序より自分たちの都合を優先してルールを変えてしまう罪を犯しています。

そして、最後、4つ目の罪は、「永遠の契約を破る」という罪。これは例えば神様とノアの間で定められた契約であったり、アブラハムと神様の間で定められた契約であったり、モーセと神様、ダビデと神様との契約のように神様と人との間で定められた約束を破って、その神様との関係を壊してしまっている罪のことです。このように神様との約束を裏切って関係を破壊するような罪を人が犯し続けているから、神様は人を裁かれるのです。そして、このような裁きを受けた結果どうなるかということ、6節

24:6 それゆえ、のろいは地を食い尽くし、その地の住民は罰を受ける。それゆえ、地の住民は減り、わずかな者だけが残される。

のろいというのは祝福の反対ですね。地を汚し、神様の律法をやぶり、神様の秩序を変え、そして、神様との関係を破壊した結果。当然、神様からの祝福を受けることができない呪われた状態に世界はなってしまう。そして、人はその罰を受けることになって、滅びなければ行けない状態になるのです。

ただ、わずかな者だけが残ると【主】は言われています。これについてはまた後で詳しく考えたいと思います。

まずは、神様のさばきの悲惨さを理解していきましょう。

【主】の前で罪を犯し、【主】のさばきを受けた結果、人はどうなるかということ7節から12節。

24:7 新しいぶどう酒は嘆き悲しみ、ぶどうの木はしおれ、心に喜びのある者もみな、うめく。

24:8 陽気なタンバリンの音はやみ、はしゃぐ者たちの騒ぎも消え、陽気な豎琴の音

もやむ。

24:9 歌いながらぶどう酒を飲むこともなく、強い酒も、飲む者には苦い。

24:10 都は壊されて荒地となり、すべての家は閉ざされて入れない。

24:11 街には、ぶどう酒はなく、哀れな叫び声がある。すべての喜びは薄れ、地の楽しみは取り去られる。

24:12 その都にはただ荒廃だけが残り、城門は打ち砕かれて荒れ果てる。

要約すると、人は喜べなくなるし、満たされることもなくなるし、楽しみもなくなり、自分たちの都や住むべき家もなくなって安息がなくなり、城門も打ち砕かれて安全もなくなる。そのような状態になってしまうのです。

これはですね。神様の裁きの結果ですけども、同時に人が神様を拒否した結果でもあるのです。神様なしでもこの世にはこんなにぶどう酒みたいに楽しいものがいっぱいある。神様なしでも都も家もあって安心だ。さらには城門もあるから安全だ。そうやって神様なしの繁栄を楽しんでいたとしても、神様のさばきのときには、それら神様なしで喜んでいたものや安心の材料にしていたものは、全部なくなってしまうのだとこの預言は私達に教えてくださっています。だから、当然、そのような裁き似合った人たちは喜びの歌も歌えなくなるのです。

それでも残るものがある)

神様は、この世の終わりの裁きのことを指して、これは 13 節のような出来事だ。と言っています。13 節を読みましょう。

24:13 まことに、大地の真ん中で、諸国の民の間で、オリーブを打ち落とすようなことが、ぶどうの収穫の後に取り残しの実を集めるようなことが起こる。

当時、オリーブの実を、どうやって収穫していたかということ、前もいいましたけども、長い棒でバンバンオリーブの木を叩いて実を落として収穫していました。でも、それによって必ず全部を取りきれるかということそうではなくって、残る実が必ずいくつかあったのです。そして、ぶどうの収穫も同じように全部取り切っちゃうのではなくって、必ずいくつか残るようなやり方をしていました。

だから、神様は世の終わりのさばきのときにどのようなやり方をするかということ、この世のすべての人を問答無用に全部滅ぼし尽くすのではなくって、そのように厳しい裁きがあってもなお、【主】のもとに残る者があるようにさばきの御業をなさるのです。そして、【主】のもとに残った実を【主】は丁寧に手元に集めてくださるの

です。

つまり、世の終わりの裁きのときというのは、オリーブの実のように多くの人が叩き落される出来事と、【主】のところに残った人たちが、【主】によって丁寧に集められる出来事。この2つの出来事がおこるのだと。そうこの預言は、私達に教えてくださっているのです。当然、【主】のもとに留まって、【主】に丁寧に集められる者たちはどうするかというと、14節から16節前半を読んでみればわかります。

24:14 彼らは声をあげて喜び歌い、西の方から【主】の威光をたたえて叫ぶ。

24:15 それゆえ、東の国々で【主】をあがめよ。西の島々で、イスラエルの神、【主】の御名を。

24:16a 地の果てから、私たちは、「正しい方に誉れあれ」というほめ歌を聞く。

多くの裁かれた人たちは喜びがなくなって歌えなくなるんですけども、【主】のもとに残ることが赦されて、【主】に集められたものたちは、高らかな喜びの賛美にあふれるのです。そして、彼らは【主】がなされたこの裁きはまさに正しい出来事だと確信して「正しい方に誉れあれ」と賛美するのです。

私達、【主】イエスキリストを信じて救われた者は、この賛美ができるものとされているのです。だから、黙示録などを見てみると、裁きの出来事がずっと書かれているのと同時に、神の民たちが高らかに神様を賛美している出来事が書かれています。だから、ある意味で世の終わりの裁きの時というのは、私達が高らかに【主】を賛美する時でもあるのです。

イザヤの嘆き)

ただイザヤは、残りの民が神様を賛美できる事を喜んで終わってはいません。16節の後半を読んでみましょうか

24:16b しかし私は言った。「私はだめだ、だめだ。ああ、悲しい。裏切り者が裏切った。裏切り者が裏切り、裏切った。」

イザヤは本来、神様を賛美する側なんですけども、彼の人々に対する愛は自分だけ救われたからそれでいいとは思えなかったのです。彼は滅びゆく人たちの姿を神様に見させられて、嘆き悲しみます。

「私はだめだ、だめだ。ああ、悲しい。」・・・このことばの中には預言者として

人々を悔い改めさせることができている。自分の不甲斐なさなどの気持ちがあるのかもしれませんが。

彼は言います。「裏切り者が裏切った。裏切り者が裏切り、裏切った。」人が神様を無視して、自分勝手に生き。自分たちだけの繁栄を求める生き方というのは、神様の前で裏切り続けている。そのような生き方なのです。そして、その結果、彼らは自分たちでは逃れることができない穴と、自分では抜け出すことができない罠に囚えられていくのです。それが 17-18 節に書かれていることです。

そして、その時世界はどうなるかということ、人が自分の力で立つことができないような大地震にみまわれるのです。それが 18 節後半から 20 節です。読んでみましょうか。

24:18b 天の窓が開かれ、地の基が震えるからだ。

24:19 地は割れに割れ、地は破れに破れ、地は揺れに揺れる。

24:20 地は酔いどれのようによろめき、仮小屋のように揺れ動く。地の背きはその上に重くのしかかり、地は倒れて、再び起き上がれない。

これは恐らく世界規模の大地震が起きることでしょうけども、それと同時に人が自分の力で立てなくされる。ということでもあるのだと思います。今でも多くの人がこのような科学が発展している時代に神なんて信じるのは馬鹿だ。宗教を信じているなんて愚か者がやることだ。っていうんですけども。それは人が自分の力でなんでもできるって、思い上がっているからです。でも、実際には人は神様なしでは自分の力では立てないのです。自分の力で立っていると信じていたとしても、それは神様によってあつという間に揺らされ倒されてしまうようなものなのです。人はそれがわかっていないから、神様は裁きの日に大きく揺り動かされるのです。

天の大軍をも裁かれる)

そして、この裁きは、人だけではなくって天の大群にも及ぶ事が書かれています。21 節 22 節を読みましょう。

24:21 その日、【主】は天では天の大軍を、地では地の王たちを罰せられる。

24:22 彼らは、囚人が地下牢に集められるように集められ、牢獄に閉じ込められ、何年かたった後に罰せられる。

その日というのは、世の終わりのことです。そして、天の大軍というのはサタンの軍、悪魔の軍のことです。黙示録をみるとわかりますが、彼らは地の王たちを集めて、神様に戦いを仕掛けようとしています。それがいわゆるハルマゲドンの戦いとか、メギドの戦いといわれるものですが。この戦いは神様と悪魔の対等な戦いではありません。悪魔は天の悪魔軍と地の勢力を寄せ集めて神様に戦いをいどみますけども、神様はそれらを圧倒的な力で囚えて、牢にいれ、最終的には完全に罰せられるのです。

その結果どうなりますか？ 地の人々を支配して、世界を自分のもののようによつていた悪魔と人が打倒されて、本当の世界の支配者である【主】が、王の王として君臨をし、栄光を表されるのです。23節を読みましょう。

24:23 月は辱めを受け、太陽も恥を見る。万軍の【主】がシオンの山、エルサレムで王となり、栄光がその長老たちの前にあるからである。

月とか太陽というのは、あらゆるところで偶像にされていたものです。でも、そのいつわりの輝きは恥をみ、まことの【主】の【主】、王の王であるお方の栄光が明らかにされる。それが世の終わりのさばきのときなのです。

まとめ)

みなさんはこの預言を聞いてどう思われたでしょうか。

怖いなど思われたでしょうか。

それとも、感謝だな。【主】よ。来てください。って思ったでしょうか。

自分の中の罪の問題が解決していないならば、これは恐ろしい預言かもしれません。でも、キリストによって罪の問題が解決され、残りの民とされているのならば、これは感謝な預言です。みなさんはどう思われるでしょうか。

残りの民とされている者があえてこの預言を悲しむならば、それはイザヤのように人々が滅びること、【主】を裏切ることを嘆くほど、人々の魂を愛しているという証拠でしょう。わたしも一人のみことばをつたえる者として、イザヤのような思いをもって人々と向き合っていかなければいけないと改めて思いさせられました。

人々の滅びを嘆く思いがあるのならば、この裁きがあることを私達は隠さずに伝えていきましょう。人々が【主】の前に悔い改めて、キリストによって神の民となっていくように仕えていきましょう。